

テモテへの手紙第二「苦しみを共にする人生」

1A 思い出す純粋な信仰 1

- 1B 親から受け継がれた純粋な信仰 1-7
- 2B 神のご計画にある苦しみ 8-12
- 3B パウロの手本 13-18

2A 忠実な奉仕 2

- 1B 忠実な働き人 1-7
- 2B イエス・キリストを思う 8-13
- 3B 真っ直ぐな解き明かし 14-18
- 4B 尊い器 19-22
- 5B 柔和な訓戒 23-26

3A 二つの生き方 3

- 1B 終わりの日の自己愛 1-9
- 2B 敬虔な生き方 10-17
 - 1C 迫害 10-13
 - 2C 聖書の靈感 14-17

4A 御国の到来 4

- 1B 御言葉の宣教 1-4
- 2B 義の冠 5-8
- 3B 同労者たち 9-22

本文

それでは、セッション3ですが、セッション2に引き続き、テモテの手紙を眺めたいと思います。第二の手紙は、パウロが間もなく皇帝ネロによって死刑に定められる前に書いています。

使徒の働き最後の部分 28 章には、ローマで、自費で家を借りて、ローマの看守によって鎖につながれていました。彼はエルサレムにおいて、主イエスが自分を異邦人に遣わすと言ったときにユダヤ人が半狂乱状態となり、それがきっかけで、囚人となりました。ローマまで来て、そして彼はこの家の中で神の国を宣べ伝えました。ローマで、パウロはネロの前で弁明しました。この時は、彼は釈放されたようです。しかし、皇帝ネロは、この時ぐらいを境に、クリスチャンに対する迫害を始めました。パウロは、言い伝えによれば釈放されてのち、再びまた捕らえられます。今は自費の家ではなく、牢獄の中にいます。初めに弁明したときにそれがうまく行かず、死刑宣告が出るのがはっきりとしました。その時に、パウロとともに労していた人が、1 章 15 節や 4 章を読みますと、アジヤからの人は全員、彼を離れてしまったのです。パウロは、4 章 16 節で、「どうか彼らがその

ためにさばかれることはありませんように。」とっています。

若い世代に対する神の御心、その使命は、「信仰を受け継ぐ」ということにあります。それは、受け継がせる者たちの使命であり、また受け継ぐ者たちの責任でもあります。そこにおいて、信仰の歩みにおいて「苦しみ」が伴います。そこで信仰や確信から離れて行く人々が出てきます。それでもなお、苦しみを共にしながら信仰を全うするという。これがテモテ第二の手紙で貫かれているテーマです。

1A 思い出す純粋な信仰 1

1B 親から受け継がれた純粋な信仰 1-7

1 神のみこころにより、キリスト・イエスにあるいのちの約束によって、キリスト・イエスの使徒となったパウロから、2 愛する子テモテへ。父なる神および私たちの主キリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安がありますように。

テモテへの手紙第一にあったのと同じような挨拶をしています。まず、「神のみこころにより」とありますが、彼がキリスト・イエスの使徒となったのは、自分の意志ではなく神の意志による、ということです。このような召しの確信が、私たちには必ず必要です。そして「キリスト・イエスにあるいのちの約束によって」という言葉ですが、パウロは、自分が死ぬことも近づいていることを知っている中で、この方にある命の約束を信じていました。

そして、「愛する子テモテへ。」とあります。これが第二の手紙に滲み渡っています。パウロにとって、信仰による子となったテモテですが、今、死ぬことが分かっている、彼は第一の手紙よりも、より感情的になり、また個人的にテモテに語りかけています。どれほどの愛情が注がれていたのかを次に見ることができます。

3 私は、夜昼、祈りの中であなたのことを絶えず思い起こしては、先祖以来きよい良心をもって仕えている神に感謝しています。4 私は、あなたの涙を覚えているので、あなたに会って、喜びに満たされたいと願っています。

パウロは、牢獄にいる時に夜昼と祈っていました。そして、絶えずテモテのことを思い起こしては、神に感謝していました。それは神がテモテを救ってくださったこと、そしてテモテを通しての神の働きのことを感謝していたのでしょう。そして彼は、「先祖以来きよい良心をもって仕えている」とっています。これは、母親がユダヤ人であるテモテが、その信仰の継承を聖書から受けていたように、ユダヤ人の先祖たちが信じていた神に、自分自身も仕えているということを言い表しています。そして、「きよい良心をもって仕えている」とっていますね。この「良心」は、テモテの第一の手紙にもたくさん出てきました。1章 18-19 節には、「それは、あなたがあの預言によって、信仰と正し

い良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。ある人たちは、正しい良心を捨てて、信仰の破船に会いました。」とあります。4章2節には、「彼らは良心が麻痺しており、結婚することを禁じたり、食物を断つことを命じたりします。」とあります。信仰によって与えられる良心を清く保つのです。

今テモテはエペソにいますが、最後にパウロと離れるときに、涙を流していたのでしょう。けれども、今、パウロは4章においてテモテを呼んで、ローマに来てほしいと願っています。多くの働き人が、パウロが牢獄に入れられてから、離れていきました。偉大な信仰の人、強そうに見える働き人も、孤独や悲しみ、不安などから無縁ではありません。一人一人の同労者が、宝のように尊いのであります。

5 私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。

「あなたの純粋な信仰」と言っています。パウロの周りにいた多くの人々には、何か他の要素があったり、自分のしたいことがあったりして、それでパウロが苦しみの中に入れられると、自分がそこにいるのは不利になると考えて、離れていった訳です。しかし、テモテはそのような計算を働かせることはできませんでした。信仰が純粋だったからです。そして、どのように信仰が純粋だったかと言いますと、祖母から、また母から幼い時から聖書によって教えられていたことでした。私たちの中に、キリスト者家族で二世以上の人々がいるでしょう。そこにある純粋な信仰を、軽んじないでください。それは非常に貴いものです。

6 それですから、私はあなたに注意したいのです。私の按手をもってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。7 神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。

テモテに預言の言葉が与えられていたのは、第一の手紙で見た通りです。ここでは、「再び燃え立たせてください」と言っています。テモテは、神のみことばを宣べ伝え、教え、勧めていくのが、彼の務めでした。その賜物が、長老たちに按手を受けていたときに与えられていたのです。しかしテモテは、若く、そして、おとなしい性格の持ち主だったかもしれません。今、彼に会ったら、とても優しく愛のある牧師で、皆が慕うような人かもしれません。けれども、いざとなった時、問題が起こったりする時にその間違いをはっきりと指摘することができなかつたのでしょうか。パウロは、愛の持ち主であり、かつはっきりと偽教師に対峙しました。ガラテヤ書2章には、ペテロに対して皆の前ではっきりとその過ちを指摘しました。割礼派の人たちがエルサレムから来たということで、異邦人の食事の席から離れて、偽りの行動を取ってしまったのです。

テモテについては、エペソの教会で年長の者たちから軽んじられて、また違ったことを教えている者たちがいるのに、牧者としての権限によって、はっきり責めることに困難を感じていたことでしょう。人々は彼を利用していたのでしょう。そして今、皇帝によるクリスチャン迫害が始まっており、みことばを宣べ伝えるものなら、パウロのように命を落とすかもしれません。そして、アジアにいる人々はみな、パウロを離れています。その中でテモテは、その内が疲れ、おびえ、もう自分にはこの務めを果たすことに消極的になっていたに違いありません。そうですね、若者に対する神の励ましは、これでしょう、神によって与えられた賜物を燃え立たせるということです。

臆病なテモテに対して、「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではな」と言います。私たちは、とかく何でも受け入れることが優しさだと思ってしまいます。けれども、それは聖書の話している柔和さや優しさではありません。真理に立てば、その真理にかなう報いよりも、むしろ失望させられてしまうようなことが起こってしまいますから、真理に立つことを避けがちです。それが、「臆病」から来ているからです。しかし福音には力があります。「ローマ 1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」その力については、これだけ強いことをパウロは話しています。「2コリント 10:4 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」私たちの持っている御霊は、力の霊なのです。

そして、次に「愛」の霊です。神の力の現われは、私たちの考える力は、他の人々を従属させるような否定的なものに捉えられますが、イエス様に働かれた聖霊は違いました。愛のうちに仕える中で神の力が現れました。「ガラテヤ 5:13 兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。」そして、「慎み」の霊です。いざという時にこそ、信仰によって大胆に踏み出す慎重さ、賢さのことを言うでしょう。教会においては、それぞれがキリストの体の器官であること、私たちが一つになっていることを考える慎み深さが必要であることを教えています(ローマ 12:3-5)。

2B 神のご計画にある苦しみ 8-12

8 ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみをともしてください。

「主の囚人」とパウロが言っています。これは大事です、自分がそのような苦しみにあったことは、何か主の働きから退けられたかのような錯覚をしてしまいます。けれども、そうではありません。むしろ、そうした苦しみを受けるように主がしてくださったのです。そして、「福音のために私と苦しみをともにしてください。」と言っています。福音の働きに入れば、その年月を経て行くうちに不利な立場、苦しい立場に置かれていくことがあります。それでもなお、主にあって与えられた共同体意識を失わないでいられるか？であります。

9 神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、10 それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現われによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。1:11 私は、この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されたのです。

「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召して」くださったというところが、始まりです。私たちは主によってこの働きをしていると思っていても、まるでこの働きが悪いことをしているかのように、みなされ、責められます。しかし、これは「聖なる招き」なのだということです。それから、さらに大事なのは、「私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによる」ということです。自分の働きが妨げられているように感じる、その逆の力が感じる、そのような時に思い出す必要があるのは、これは自分の働きではなく、神のご計画の中にあるものなのだ、ということであります。そしてもう一つ大事なのは、「恵みとによる」ということです。自分が神の恵みによって救われた。罪人のかしらである私が、この上もない寛容をもって救われ、そして神の福音を伝える働きに入れられている。この恵みの真理から離れないということであります。そうすれば、何かうまく行かないことが起こっても、それでもそこには神がおられるという信仰に立つことができます。

パウロは、「この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命された」という自負を忘れていませんでした。この牢獄は、ここではないかと思われているものがローマにあります。岩をくりぬいた穴、貯水槽の跡であり、かつては死体を投げ込むようなところであり、そして、穴から食べ物を吊るされてくる、暗く、冷たく、閉鎖的な所でした。



12 そのため、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

主をよく知っている、それで自分が主にお任せしたものを、かの日まで守ってくださることを確信

¹ マメルティヌスの牢獄

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%A1%E3%83%AB%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%8C%E3%82%B9%E3%81%AE%E7%89%A2%E7%8D%84>

している。すごいです、どれだけ主を人格的に知っているかが試されます。そして、自分がたとえ死んでも、主が自分が忠実に仕えたものについては、必ず成し遂げてくださることです。

3B パウロの手本 13-18

13 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。14 そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。

第一の手紙にも、「ゆだねる」という言葉がありました。「手本にしなさい」と言っていますが、そのままそのことばを真似して保っていきなさい、ということです。これは、とても挑戦を受ける言葉です。自分の教えていることを見せていかないといけません。この教えは、一体どういうものなのかを自分の生活のあり方で見せていかないといけません。そしてここで大事なのは、「キリスト・イエスにある信仰と愛をもって」ということです。教条的に、その教えを守っていけばよいものではありません。現実の生活の中で、目に見えなくともそれでも信じるという信仰、生きた神学が必要なのです。それから、「愛」が必要です。信じて生きていく時には、必ず愛という動機が働いていかないといけません。

そしてパウロは、「あなたにゆだねられた良いもの」と言っています。自分にゆだねられたものが、何か悪いものであるかのように、人々はみなします。自分に気に入るものを提供してくれない時に、なんと愛がないことか、なんと偏狭であるかと責め立てます。しかし、これらは良いものなのです。パウロは確認しているのです。そしてパウロは強調しています。「私たちのうちに宿る聖霊によって」と言っています。自分自身ではそれを守ることはできないのです、聖霊の助けによって初めて守ることができます。

15 あなたの知っているとおり、ア ज्याにいる人々はみな、私を離れて行きました。その中には、フゲロとヘルモゲネがいます。

先ほどから話しているように、ア ज्याにいる人々はみな、パウロを離れていきました。人々は魅力を感じなかったのでしょう。もっと都合の良い教えに走って行きました。そして、パウロは名をあげていますね。これは、指導者の間では必要な情報です。聖書も、明確に、偽りの教えや行動に陥った者たちを名指しで、神は残しております。

16 オネシポロの家族を主があわれんでくださるように。彼はたびたび私を元気づけてくれ、また私が鎖につながれていることを恥とも思わず、17 ローマに着いたときには、熱心に私を捜して見つけ出してくれたのです。18 ..かの日には、主があわれみを彼に示してくださいますように。..彼がエペソで、どれほど私に仕えてくれたかは、あなたが一番よく知っています。

オネシポロが彼のところにやってきました。おそらくエペソにいる執事でありました。パウロがエペソで働いていた時も、仕えてくれた人です。ローマにおいて、熱心にパウロの居場所を探しました。これは大変勇気のあることです。自分のいのちさえも危うくなります。それでも見つけてくれたのです。このような形で、私たちは福音の中に生きる時に、困難なことがあっても、それでも苦しみを共に分かち合うことの重要性です。

2A 忠実な奉仕 2

次に2章は、忠実に働いていくことの重要性をパウロが説きます。

1B 忠実な働き人 1-7

1 そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。

テモテにとって必要なこと、また主に仕えている中で必要なことは、これです。「強くなりなさい。」であります。私たちは、主の働きの中に従事すると霊の戦いの中に入ります。あの手、この手を使って、私たちが落胆し、あるいは罪への誘惑し、その奉仕をすることができないようにさせてしまいます。ここで大事なものは、「キリスト・イエスにある恵みによって」と言っていることです。テモテの頑張りによって強くなりなさいと言っているのではないのです。自分の頑張りが足りないから、こんなことが起こっているのだという悪い反省はしてはいけません。もっと伝道していないから、このような悪い状況が起こっているのだとか、自分ももっと何かをしなければいけないと思って強くなるものではありません。むしろ反対です。イエス・キリストがしてくださったこと、この方の恵みによって強められます。

2 多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。

パウロは他の教会の指導者たちと共に、テモテに手を置いて、そうすると預言によって、テモテに聖霊の賜物が与えられたことが告げられたという時があったのだと思います。そこでパウロは、テモテに数々の健全な教え、しなければいけないこと、語らなければいけないことを教えたものと思われる。それが、「多くの証人の前で私から聞いたこと」ということです。

ここでパウロは、四世代にまで渡る継承を書いています。自分が第一世代、そしてテモテが二世帯、それから「教える力のある忠実な人たち」でありますから、彼らが第三世代、そして「他の人」ということで第四世代です。このように重層的に伝えていく働きです。その中で重要な特質は、「忠実である」ということです。そして、忠実な主の仕え人として、何が必要かを三つの喩えを使って教えています。

3 キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをとみにしてください。4 兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。5 また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。6 労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです。7 私が言っていることをよく考えなさい。主はすべてのことについて、理解する力をあなたに必ず与えてくださいます。

初めに、「キリストにある兵士」であります。二つの特徴があります、一つは「苦しみや困難がある」ということです。もう一つは、「徴募した者を喜ばせる」ということです。これは、私たちキリスト者にとって非常に必要とされる自己認識です。私たちの主の命令は、私たちが守ればよいもの、選択肢ではありません、上官が命令したことが絶対なように、私たちは全能のキリストの命令の下にいるのです。これが分かれば、私たちの中から主の御霊の力が表れます。主の働き人の二つ目の定義は、「競技者」にあります。競技者については、パウロは数多くキリスト者信仰についての喩えを使っていました(例:1 コリント 9:24-25)。規定がありますが、それは目標を得るための規定であり、私たちがそれに則っているからこそ賞を得られます。けれども、信仰の道を外す人たちが非常に多く、そうではない、規定の中で走るのだよ、ということです。第三の喩えですが、「労苦した農夫」であります。愛のあるところには、必ず労苦があります。そして、農夫ですから必ず、天に頼らなければいけない面があります。そして、労苦したからこそ第一の分け前にあずかれます。

2B イエス・キリストを思う 8-13

8 私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思ってください。9 私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。10 ですから、私は選ばれた人々のために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。

イエス・キリストのことを、いつも思っています。主こそが、私たちの人生の目標です。そしてパウロはもう一つの確信を持っていました。それは、みことばはつながれていないということ。だから、つながれている中でも、なおのこと福音によって救われる、選ばれた人々がいることを思って伝えていたということです。ここまで、私たちが主に忠実であることに、環境によって左右されないということです。

11 次のことばは信頼すべきことばです。「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。12 もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。13 私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」

イエス・キリストを思うならば、私たちの人生もイエス・キリストのようになっていくということです。一つ目は、「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。」主は、「マルコ 8:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」と言われました。二つ目は、「もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。」であります。これは、ローマ 8 章 17 節に説明されています。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」神の命を、他の人々も分かち合っていく、その人たちも神に拠って生きるように治めていくということです。それが忍耐によって、与えられます。三つ目は、「もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。」です。福音を恥と思い、キリストを否むのであれば、キリストも私たちを否まれます。主は、「人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。(マタイ 10:33)」と言われました。そして四つ目は、「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」であります。これは慰めであります。三つ目のことをことごとく失敗してしまったのが、あのペテロです。イエス様を三度も否みました。けれども、彼は主の憐れみによって回復しました。

3B 真っ直ぐな解き明かし 14-18

14 これらのことを人々に思い出させなさい。そして何の益にもならず、聞いている人々を滅ぼすことになるような、ことばについての論争などしないように、神の御前できびしく命じなさい。15 あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。16 俗悪なむだ話を避けなさい。人々はそれによってますます不敬虔に深入りし、17 彼らの話は癌のように広がるのです。ヒメナオとピレトはその仲間です。18 彼らは真理からはずれてしまい、復活がすでに起こったと言って、ある人々の信仰をくつがえしているのです。

私たち教会に集っている者たちにとって、一つの戦い、あるいは葛藤がありますが、それは、「一つのことを思っている」という戦いです。ダビデの子孫として生まれ、死者の中から甦られたイエス・キリストをいつも思うこと、この方と共に生き、忍耐し、この方の真実の中で生かされていくということを、いつも思い出している営みが私たちにあります。教会に集うにあたって、人々が他のものを期待してきており、その期待に逸れていってしまう誘惑があります。自分を楽しませてくれる何かを求めています。人々を助けるボランティア活動のような期待もあるでしょう。あたかも互いに表彰状を渡すような、それぞれのしていることが褒められるような雰囲気づくりを作りたいと願っている場合もあるでしょう。

その中で、教会において牧者や教師、また聖徒たちが取り組むべき主なことです。初めに、「熟練した者」とあります。これは、「適格者」とも訳すことのできる言葉です。仕事をしっかりとこなせる

適格者だということであり、認定された人ということでもあります。真理の御言葉について、アマチュアであってはいけない、熟練した者でなければいけないということです。そして、「真理のみことば」とありますが、これは偽りもたくさんはびこっていることを前提として話しています。そして、「恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう」と言っていますが、人々に対して恥じることのないように、ということよりも、神に対して恥じることのないように、ということです。神に適任者として認められるように、神に自分を捧げなさいという勧めです。

4B 尊い器 19-22

そして、偽りの教えのみならず、きよい器でいられるように自分自身を守っていなさいという勧めが次にあります。

19 それにもかかわらず、神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」20 大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。21 ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。22 それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。

器として用いられる時に、いつも尊く用いられる器でなければいけないのですが、その時に若い者が、性的にも聖く保っていることがいかに大切かをここでパウロは教えています。コリント第一においては、遊女と一つになれば一心同体になってしまうとあります。それは、私たちが体で行なったことが、霊においても魂においてもつながってってしまうからです。失敗してしまった者には、神の憐れみと恵みが、悔い改めた魂にあります。しかし、その傷を克服することがどれだけ時間がかかるかは、ダビデの失敗を見ればお分かりだと思います。

5B 柔和な訓戒 23-26

23 愚かで、無知な思弁を避けなさい。それが争いのもとであることは、あなたが知っているとおります。24 主のしもべが争ってはいけません。むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍び、25 反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。26 それで悪魔に捕えられて思うままにされている人々でも、目ざめてそのわなをのがれることもあるでしょう。

不義から離れること、自分自身を聖めることで必要なのは、次に、「争いを避ける」ことです。無知な思弁について、我々男は、また若者はその口論の中に巻き込まれる誘惑が強いです。それから避けなさいとパウロは教えています。そして、「むしろ、すべての人に優しくし、よく教え、よく忍

び、反対する人々を柔和な心で訓戒しなさい。」とあります。人々に対する態度は優しさです。そして、もう一つはしっかりと教えていくことです。その時に忍耐を働かせます。教えるのを理解するには、時間がかかります。しかし、主がもしかしたら彼らの心を変えてくださるかもしれません。主が心を変える方なのだということを知るのは大切です。

3A 二つの生き方 3

そして3章には、二つの生き方について書いてあります。

1B 終わりの日の自己愛 1-9

1 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。

パウロは、自分の死期が近づいている、自分の終わりが近づいていることも意識しながら、この世界にも終わりがあることを意識しながら書いています。「終わりの日」であります。

2 そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、3 情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、4 裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。

パウロは初めに、「自分を愛する者」と言っています。これが、すべての悪の始まりです。自分を愛しているから、金を愛したり、大言壮語する者になったりします。自分ではなく、キリストが私たちの生き方であるのに対して、キリストではなく自分、というベクトルが強く働いている時代に私たちは生きています。「愛」の意味、中身が変えられている時代に生きています。しかしこれが、「教会」の中で起こって来る現象でもあるということです。世に起こっていることが、そのまま教会で起こり、しかも、それが一種の教えとして広まっていくということでもあります。

今、私たちは困難な時代に生きています。若者の世代は、教会における自分と世における自分との間になおさらのこと葛藤を抱いている時代に生きていけると言えるでしょう。これまで先の世代が教えてきた教えでは足りない部分が多いでしょう。そこに知恵が与えられることを祈ります。

6 こういう人々の中には、家々にはいり込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、7 いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。8 また、こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。彼らは知性の腐った、信仰の失格者です。9 でも、彼らはもうこれ以上に進むことはできません。彼らの愚かさは、あのふたりのばあいのように、す

べての人にはっきりわかるからです。

教えているけれど、いつまでも学ぶことがないという状態、とても悲惨ですが、現実にかかる問題です。

2B 敬虔な生き方 10-17

1C 迫害 10-13

10 しかし、あなたは、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、11 またアンテオケ、イコニウム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょう。しかし、主はいつさいのことから私を救い出してくださいました。12 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。13 しかし、悪人や詐欺師たちは、だましたりだまされたりしながら、ますます悪に落ちて行くのです。

「しかし、あなたは」とパウロは、テモテに言っています。パウロは主にあって、テモテには自信があったのです。彼は信頼のおける、主の働き人でした。パウロの教えがあり、その教えを学んでいただけでなく、その教えから出てきている行動、計画にもテモテは付いてきました。それから、信仰や寛容や愛、忍耐にもついてきていっています。その中で、必ず迫害を受けます。迫害や苦しみは、主のために生きようと思えば付き物なのです。私たちが今持っている葛藤は、付き物です。

そして、だまされたりという悪人がいるということですが、敬虔を装いながら実を否定している者たちの動きであります。テモテはこのことに悩んでいましたが、彼らの姿を生々しく伝えることによって、テモテの心の悩みを少しでも軽減させようとしています。悪人や詐欺師は、自分が騙しているだけでなく、自分自身が騙されているということです。デービッド・グジックという、カルバリーチャペル・サンタバーバラの牧師がこのように言っています。「心の動機というのは大事ですが、時にそれだけを強調してしまう傾向があります。多くの悪いことは、誠実になろうとして騙されている人々によって、すばらしい動機をもって間違ったことを行なおうとしている人々によって、もたらされます。そして、人々は彼らのすばらしい心を見て、それでその危険な欺きの行動を受け入れてしまいます。ただ動機だけで付いていくのではなく、それが真理にかなうものなのかどうか、測り知る必要があるのです。²」

2C 聖書の靈感 14-17

14 けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人々からそれを学んだかを知っており、15 また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのため

² <https://enduringword.com/commentary/2-timothy-3/>

に有益です 17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

主が教えておられることは、「学んで確信したところにとどまっていなさい。」であります。とても単純なことですが、この単純なことを新約聖書は一貫して教えています。使徒ヨハネが第一の手紙で言いました。「2:24 あなたがたは、初めから聞いたことを、自分たちのうちにとどまらせなさい。もし初めから聞いたことがとどまっているなら、あなたがたも御子および御父のうちにとどまるのです。」特にテモテは、母や祖母からの信仰の遺産がありました。

「聖書はすべて」という言葉が大事です。一部ではなく、全てであります。神がまずありきで、それで私たちの方が変えられるべきなのです。神中心であり、人中心ではありません。自分に都合のようところだけをつまみ食いできないのです。なので、教えがあり、それから戒めがあります。自分が間違っている所を知ることが、聖書の教えです。神が正しく、自分は正しくないのです。そして神の道に自分を合わせるということです。そして聖書の教えが、私たちが奉仕の働きに十分に整えることができると、パウロは確信を持っています。そう、彼は間もなく死にますが、聖書の教えにしっかり留まっていれば、大丈夫だと言う確信があったのです。

4A 御国の到来 4

最後にパウロは、御国の到来、イエス様の再臨を前面に出して厳かに命じます。

1B 御言葉の宣教 1-4

1 神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

「生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で」と言っています。これからパウロは、神の御前で、テモテやその他の奉仕者たち、またすべてのクリスチャンが、キリストの審判の前に立つことを話します。テモテが行なっていること「みことばを宣べ伝え」ることが、人々に御国を受け継がせることができるようにするからです。そして、「時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」と、悪くても一貫して教えていなさいと強調しています。さらに、「教えながら、責め、戒め、また勧めなさい」と言っていますが、それは、「寛容を尽くし」という態度に裏打ちされています。

3 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。4:5 しかし、あなたは、どのようなばあいにも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。

終わりの日は、「自分につごうの良いことを言ってもらう」ことをします。テモテ第二 3 章にあったように、困難な時代には、自分を愛するという強い流れがあります。そして、「気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め」とあります。自分にとって聞き触りのよう言葉を語ってくれる人を探します。それが、感情的なものかもしれません。自分の気分を良くしてくれるようなものかもしれません。また知的なものかもしれません。自分の知的欲求を満たせるものかもしれません。けれども、牧者の務めが、神の権威をもってみことばを宣べ伝え、また健全な教えを教えて、責めて、戒め、そして勧めるのであれば、聞く人々は、自分を否み、自分の道を捨てて、神の道を選び取る責任があります。「寄せ集め」という言葉が、自己中心性を表していますね。

2B 義の冠 5-8

しかし、しっかりと務めを果たした者たちには、待っている賞があります。

6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。4:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

どこを目標にするのか？であります。若い牧者であるテモテは、たとえ自分が世を去るのがずっと後になったとしても、それでも御国の到来と、その時にいただく義の冠をいつも仰ぎ見て、それでしっかりと今のことを行なっていくのです。主の現れを慕うことは、決して現実逃避ではありません。むしろ困難な時代に耐える力を与え、さらに現実の世界で信仰を働かせる勇気を持たせます。

3B 同労者たち 9-22

9 あなたは、何とかして、早く私のところに来てください。10 デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまう、また、クレスケンスはガラテヤに、テスはダルマテヤに行ったからです。11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。12 私はテキコをエペソに遣わしました。13 あなたが来るときは、トロアスでカルポのところに残しておいた上着を持って来てください。また、書物を、特に羊皮紙の物を持って来てください。14 銅細工人のアレキサンデルが私をひどく苦しめました。そのしわざに応じて主が彼に報いられます。15 あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らったからです。

パウロのこの言葉に、彼の生身の人間の姿が表れています。この人間性を神は否定することはないません。やはり、信仰の友が共にいないということ、それは誰にとっても辛いものです。そして、他の手紙でもそうですが、パウロと他の働き人や信者との関わりはとても広いものでした。私たちは彼の手紙を読むと、その書かれている教えに注目しているため、彼がそのような人間のふ

れあいをしていることをふと忘れてしまいます。信仰の友を大切にしてください。

そして、さまざまな働き手が出てきました。デマスは、主の現われを慕うのではなく、世を慕ってしまいました。徐々にこのことが起こってしまいました。走り切ることができず、競争者としての規定を守れなかったのです。その反面、テモテを始め、マルコ、テキコ、そしてあのマルコも自分に付いている人々、福音の世界に生きている人々です。

16 私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。どうか、彼らがそのためにさばかれることありませんように。17 しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。私はししの口から助け出されました。18 主は私を、すべての悪のわざから助け出し、天の御国に救い入れてくださいます。主に、御栄えがとこしえにありますように。アーメン。

働き人から見捨てられることほど、辛いことはありません。しかし、究極の慰めはここにある、主ご自身が共に立っていてくださったという、主のご臨在です。主がおられることが、最も大切になっているかどうか？であります。そして、彼は確信していました、みことばが余すところなく広がっていること、それから、「ししの口」おそらく悪魔のことでしょう(1ペテロ 5:8-9)。

19 プリスカとアクラによろしく。また、オネシポロの家族によろしく。20 エラストはコリントにとどまり、トロピモは病気のためにミレトに残して来ました。21 何とかして、冬になる前に来てください。ユブロ、プデス、リノス、クラウデヤ、またすべての兄弟たちが、あなたによろしくと言っています。22 主があなたの霊とともにおられますように。恵みが、あなたがたとともにありますように。

ここはテモテに、彼も良く知っている働き人がどこにいるのかを伝えている箇所です。最後の手紙のしめくりです。主がともにおられるように、霊と共におられるようにということです。